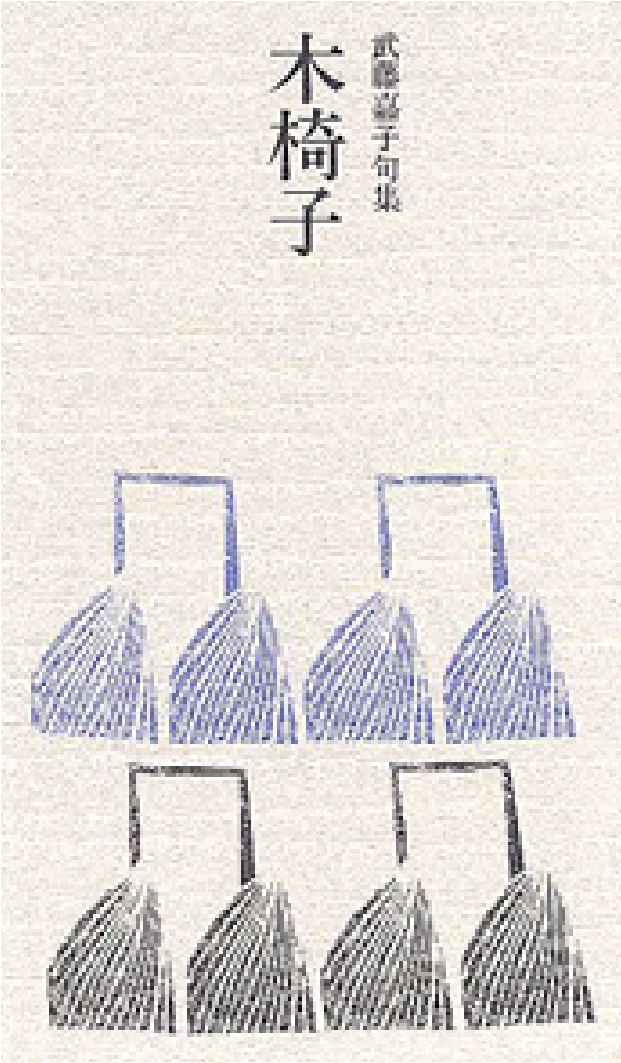

武藤嘉子

木　椅　子

露拭けば木椅子の木目雲の如し

能村登四郎

青空に声をかけたき辛夷の芽

裏門から入つてといふ梅見かな

老見せぬ母の手仕事木の芽風

風邪寝して塩かげんよき夫の粥

雪を掃き来るはずもなき父思ふ

わが姉の若き祖母ぶり初節句

夫に似る子の顔が浮く浮輪かな

思ひ切り叫びたくなる雲の峰

放心の耳につくつく法師かな

水すまし水に疑問符いくつ書く

蝉穴につづく根の国亡き子ゐむ

母の手も借りてととのふ盆の棚

桃ひとつ夫と分ちぬ葬りあと

水の秋さらさらと米二合かな

黄泉の子へたんぽぽの袈吹きにけり

かすむ目をそつと拭ひぬ鵙日和

身ほとりに母ゐて十薬よくかわく

こととことと煮たる嘆きの浅蜊汁

あと何を喪ふ春の嵐かな

磴のぼる一段ごとの淑気かな

卒寿なる母との旅や遍路めき

生くるとは陽炎を追ふ旅に似て

終ひの地とならむ子の家梨の花

日輪の雲間に小さく一の酉

冬ざくら少し休めと木椅子あり

亡き子のこゑきくすべのなき月の雁

霹靂やはたちの吾子を連れ去られ

メロン切る享年二十歳の誕生日

白芙蓉子を擲ちし手の写経なす

化野に子なき身を置く雪解風

納骨のひと足ごとの牡丹雪

青空に声をかけたき辛夷の芽

フリージヤの白き素直さ子らにあり

菖蒲笛切れぎれに鳴り長湯の子

父待ちてつひに寝し子よ遠蛙

手をつなぎ花となる子ら梅雨晴間

子の丈をかくして葉鶏頭燃ゆる

大いなる落暉青田の中に揺れ

抱きし嬰のそり身によろけ雲の峰

雪の白山遠見に友禅流しかな

眉山いま大き入日に霞みたり

松とれて六十路へ刻の動きだす

卒寿なる母との旅や遍路めき

初蝉は黄泉の子の声鳴きほそり

夫の遺影に素肌ちらりと見られけり

冬の滝黄泉のこだまと思ひけり

大綿の指にふれたる身のしまり

冬夕焼遊び足りに子影しるき

煤湯して夫恋ふことも齢かな

その一花母とす山茶花明かりかな

著者略歴

武藤嘉子（むとう・よしこ）
昭和8年3月3日　東京に生る
昭和48年9月　沖に入会
平成元年　沖同人
平成4年　俳人協会会員

句集　木椅子（きいす）〈精選作家双書Ⅷ〉
2001 年 2 月 15 日　発行
著 者　武 藤　　嘉 子
発行人　本 阿 弥 秀 雄
発行所　本 阿 弥 書 店

Ｂ６変形　二句組
PDF 製作　俳誌のサロン